〔資料紹介〕

千葉市殿台町殿台貝塚出土の遺物について

阿　部　芳　郎

I　はじめに

殿台貝塚は、東京湾に注ぐ都川から分岐する葭川支谷に面した台地上に位置している。周辺の地形は、葭川の複雑に分岐する樹枝状の支谷によって形成されている。本貝塚は、この様な成因から成る標高16～24m、現水田面との比高約18mを測る台地上に存在する。周辺地域には、先土器時代より中、近世に至るまでの数多くの遺跡が存在しており、その中でも特に、葭川や都川の流域には縄文時代中期から後期にかけて形成された大型の貝塚が群在する地域であることはあまりにも有名である。これらは、東京湾東海岸地域に於ける縄文時代中、後期の貝塚分布の中心地域の一画を占めている。

本地域における縄文時代中、後期の貝塚の特徴は、環状または馬蹄形を呈しその直径が50mから100mにも及ぶ大型のものが群在する事であり、それらは、とりも直さず、この東京湾東岸地域が大型貝塚の形成に恰好な条件を備えていたからに他ならない。

周辺の主な遺跡としては、本遺跡より西方約4kmに古くから調査が行われ、後期、晩期の遺物を主体的に出土した犢橋貝塚や、西方約2kmに同様に古くから調査が行われ、後期、晩期の遺物を出土している園生貝塚が位置し、また東寺山支谷を隔てた南東約1kmに縄文時代早期の遺物を出土し、石神式が提唱されるに至った石神遺跡や、同台地上に隣接して中期・後期にわたる東寺山貝塚その北方に中期を主体とした廿五里北貝塚、昭和47年の宍倉昭一郎氏によって加曽利EⅠ式期の埋葬人骨を伴なう住居址の調査が行なわれた廿五里南貝塚がある。そして更に約4km南下した都川支谷に面した台地上には、市内では、数少ない縄文時代前期の諸磯b式・浮島式を主体的に出土し、比高差の少ない低台地上に立地するという特異な占地状況を示す宝導寺台貝塚や、環状に小貝塚が点在する木戸場貝塚や荒屋敷西貝塚など、中期以前にも活発な貝塚の形成が行なわれていた事を示す遺跡が集中している。中期以降に属するものには、貝塚町貝塚群の名で総称されている後期の堀之内Ⅰ式から安行3b式までの遺物を出土した台門貝塚、中期の阿玉台式から加曽利E式を中心として後期の堀之内Ⅰ式まで継続する荒屋敷貝塚、中期の加曽利E式から後期を経て晩期の安行3a式までを主体とした草刈場貝塚などの大型環状貝塚が群在している。又、更に南下した都川水系の古山支谷には、加曽利貝塚が位置している。

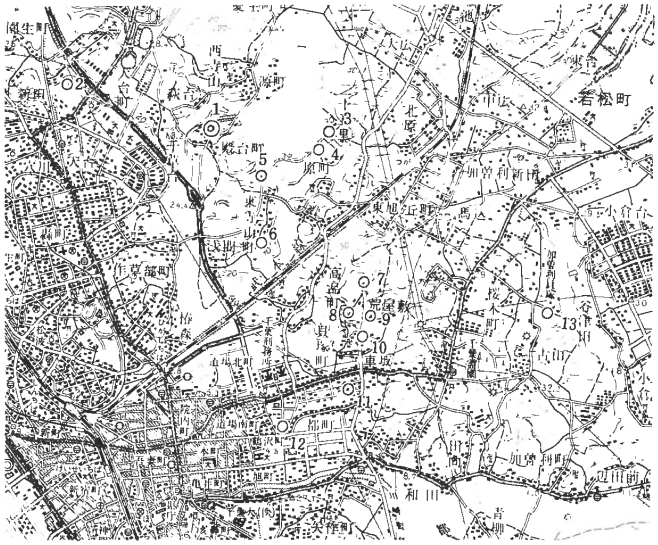
殿台貝塚は、明治14年に、加部巌夫により「好古雑誌」に発表された「古器物見聞之記」にその名を見る事が出来る。（註1）その後、昭和42年に武田宗久氏により踏査され、昭和49年に編纂された「千葉市史」、原始、古代、中世編に於いて、所属時期を加曽利E式から加曽利B式とする馬蹄形貝塚として記録されている。古くから知られていた大型の貝塚ではあるが、現在に至るまで記録に残る発掘調査は行なわれていない（註2）。

II　遺跡の現状

貝塚は、現在、台地上を南北に走る道路によって分断され、又その両側には、住宅が建ち並んでおり、現状からでは、すでに貝塚の全様を知り得る事は不可能である。自然地形の残されている部分は、道路北側の山林内のみに限定されている。この山林内の大半は、旧地形の台地端部から台地下へ向う斜面部分に相当する位置で、斜面下は、道路を挟んで、葭川支谷の水田に続いている。

貝層部は、台地上を通る道路西側に接する神社周辺と、山林内の斜面部分に確認された。

神社付近は、キサゴ、ハマグリ、オキシジミなどを主体とした貝層が埋存するらしいが、神社内の建築物の建立や隣接する住宅が、かなり周囲を削平していることなどから考えて遺存状態は良好



第１図　殿台貝塚と周辺遺跡

1．殿台貝塚　　（後・晩期）
2．園生貝塚　　（後・晩期）
3．廿五里北貝塚（中・後期）
4．廿五里南貝塚（中・後期）
5．東寺山貝塚　（中期）
6．石神遺跡　　（早期）
7．草刈場貝塚　（後・晩期）
8．荒屋敷西貝塚（前期）
9．荒屋敷貝塚　（中・後期）
10．台門貝塚　　（後・晩期）
11．木戸場貝塚　（前期）
12．宝導寺台貝塚（前期）
13．加曽利貝塚　（中・後・晩期）

とは言えない。

山林内の貝層は、住宅地との境界に土塁状の土盛りが施されている為、土塁直下に良好な貝層が埋存しており、その一部が民家裏手の削平部分に露出している。ハマグリ、キサゴ、オキアサリなどを主体とした混土貝層が約40cm程堆積しているが、場所によりその様相は、かなり異なる様である。山林内の貝層は、土塁と接する私道の削平によって地表面に貝や土器片などの遺物が散乱していた。地表に散布している貝は、決して多いとは言えない状況であったが、周辺のボーリング棒による探査によると、この私道付近から斜面下方に向い、良好な貝層が埋存している事が確認された。斜面である為、貝層上に堆積する土層が下方に向い次第に厚さを増して、正確な範囲の確認が出来なかったが、私道付近に於いては、地表下約40cmに良好な貝層が、厚さ約50～60cmにわたり確認出来た。また道路の削平面及びその断面に漆黒の遺物包含層が約20cmの厚さで堆積している事が確認され、その一部は、ボーリングによって貝層直上付近を被覆する土層である事が判明した。そしてこの包含層は、多くの土器片を含んでおり、この層から、比較的まとまった土器片を得る事が出来た。

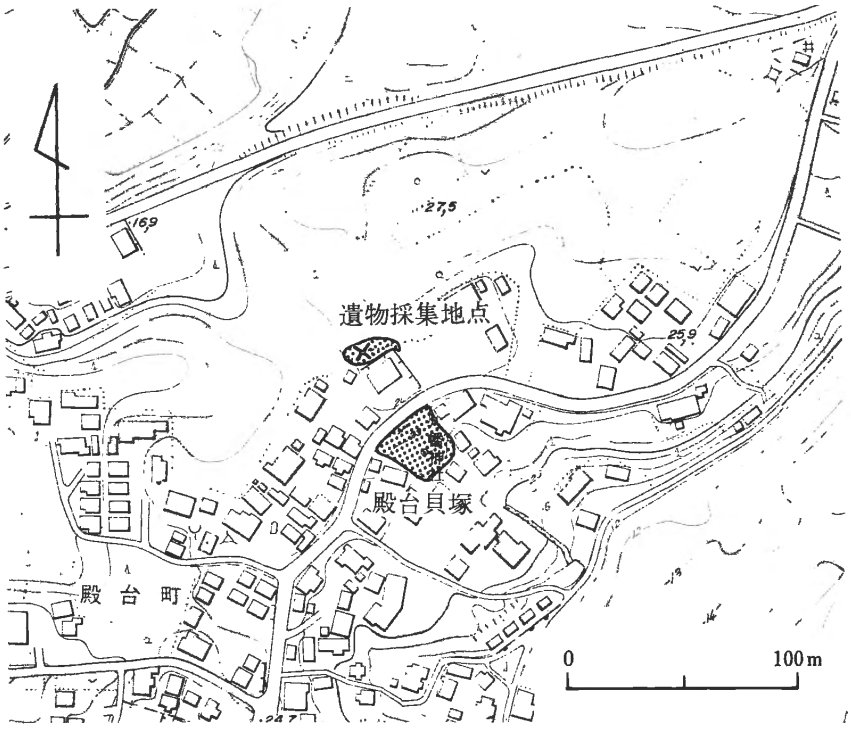
現存する貝層部は、この山林内に確認されたものが、最も良好な状況にあると考えられる。他に地表面に貝殻の散布する地点が数ヵ所が認められたがいづれも地下に貝層の存在を確認する事は、出来なかった。

以上の様な現状から殿台貝塚の形状を把握するには、制約が極めて多いのであるが、神社付近が、本台地の東側縁辺部に近い事や、山林内の貝層も同様に西側の台地縁辺部から斜面にかけて貝層の堆積が観られる事及び、台地上の住宅地周辺には、貝の散布が殆んど認められなかった事などから考えて、現在の台地上の住宅地付近を中心部分として、台地東・西縁辺部を中心に貝層を形成した末発達な環状を呈する貝塚であった事が推定される。従って中央部分を中心に存在したと思われる集落遺構の大半は、すでに宅地化され煙滅したものと考えられる。

Ⅲ　発　見　遺　物

今回、ここに紹介する遺物は、私が昭和47年に遺跡を踏査した際に、台地西側の斜面の貝層部周辺（第１図参）から採集されたものであり、その大半は、貝層中または、貝層上に堆積した土層中に包含されていたものが、土塁の築造や道路の削平によって掘りおこされたものと考えられる。また中には、道路の削平断面に露出していた貝層上に堆積する漆黒の色調を呈し強い粘性を示す遺物包含層より採集されたものがある。

遺物は、大半が土器片であり、その他に骨角器と貝製品が各々１点づつ採集された。自然遺物では、貝類と若干の獣骨がある。獣骨については、未同定であるが、貝類は、その種名を記しておいた。



第2図 ▶
殿台貝塚の貝層
分布図

1）土　器

採集された土器片は、約100片であり、その主体は、後期末葉から晩期初頭にかけてのものであり、他にわずかに、前期の黒浜式、中期の加曽利E式、後期の加曽利B式などがある。その中でも図示したものは、安行式土器群に含まれるものである。以下、個々の具体的な説明を行なっていく訳であるが、説明の便宜上、主に形態と文様から、大別7類に分けて説明を行なう事にする。

深鉢形土器第1類（第4図1・2・3）

胴部最大径を胴上半部にもち、口縁が緩く内彎する深鉢形土器である。口辺部付近には、3～4段の隆起帯縄文が巡らされており、数ヶ所に縦位の瘤状の突起が施され、隆起帯を連結している。以下は、右傾位の条線を施している。口縁部が、肥厚する事を特徴としているが、以下胴部にかけては、5mm前後と比較的薄手のつくりである。いづれもRLの縄文原体を使用している。色調は、赤褐色乃至、黒褐色を呈し胎土に少量の小砂を含み焼成は良好である。

深鉢形土器第2類（第4図4・5・6・第3図1・2）

本類は、先述した貝層上の漆黒を呈する遺物包含層中より採集されたもの（第3図2）と付近の貝層中出土と思われるもの（第3図1）の2点の図上復原を行なった土器を含んでいる。4乃至5単位の波状口縁の深鉢であり胴部にくびれを持つ。文様は、第1類と基本的には同様であり、隆起帯状文と瘤状の突起から胴上部の文様帯が構成されている。

これらは、形態や文様帯などから更に2分して考える事ができる。すなわち、第3図1の復原個体と第4図4・5などの発達した隆起帯縄文と横刻みの瘤状突起によって特徴づけられる4波状口縁の一群（仮に第2類a型とする。）と、第3図2と第4図6などの平滑化した隆起帯縄文と退化した縦刻みの瘤状突起とa型の4波状から5波状の口縁へ変化するという事によって特徴ずけられる一群（仮りに2類b型とする。）である。両者の間には、共通する要素が多いが、波状単位数の変化や、元来安行式土器群前半のメルクマールの一つとされていた隆起帯縄文と、瘤状の突起という文様要素が、若干の変容を遂げている事が観察される。両者ともに縄文原体は、RLである。両者の更に詳しい観察については、後段で他の土器群と共に述べる事にする。

深鉢形土器第3類（第3図3・4、第4図12・13・14）

これらは、安行式土器群の中でも最も安定して存在する所謂粗製土器である。2点の復原個体を含んでおり、その中でも第3図3は、深鉢形土器第2類b型の土器と共に、貝層上の遺物包含層から採集されたものである。最大径部を胴部上半に持ち、口縁は緩く内彎している。形態は、おそらく底部の極めて小さい深鉢になるものと思われる。口縁部と最大径部付近に、各々一条の紐線文を施しており、胴上部には、横位方向、以下は、いづれも右傾位の条線を施している。第3図4及び第4図10は、胴上部に数単位の孤線文が施されている。口縁断面形は、部厚い外削ぎ状を呈しているが、以下の器厚は、6㎜～8㎜と器高に比べて比較的薄手の土器である。

その他の深鉢形土器（第4図11・15）

それぞれ、異なる特徴を具備しているが、量的にまとまりがない為、ここに一括して扱った。8は、横位の条線のみを施した深鉢である。この条線は、胴部以下では、右傾位に施されるものであろう。形態は、第3類と大差ないと思われる。従来、姥山台II式に伴なう粗製土器とされているものに等しい。15は、口縁部に縦位の刻みをもつ小突起を施こし胴上部には、横位の矢羽根状文を描いているもので、以下は無文となり、粗い縦位の成形痕のみが観察される。

浅鉢形土器第1類（第4図7・8・9）

3点の浅鉢形土器は、いづれも貝層上の遺物包含層から深鉢形土器第2類b型と同第3類の1部と共に採集されたものである。いづれも胴部の張る形態であり、7・8は、口縁部に太い一条の沈線が巡らされており、口縁部には、7はS字状、8はC字状の小突起を付している。文様は、大体最大径部以上に集約され、8・9は、縦位の刻みをもつ瘤状の突起が付され、7は隆起線上に押捺を加えたものが付されている。三者共に三叉文を中心とした入り組文を施こし、縄文は、RLの原体を用いている。

浅鉢形土器第2類（第3図6）

底部から口縁へ向かいほぼ直線的に開く浅鉢である。口縁部には、2個1対の小突起が付されている。文様は、2条の沈線を巡らし上向きの連続孤線文や、所謂コンパス文を施し、底部付近は、一条の沈線を巡らし、それぞれ内部にRLの縄文をを施文している。底部は、張り付け底状の剝離痕が、観察される為、あるいは、台部が付く可能性があるかもしれない。

異形土器（第3図5）

丸底に近い底部であり、その中心部にボタン状の張り付けをもつ。胴部は、沈線によって区画された内部に向い合う三叉状文を中心として「く字」状の沈線を施し入組み状文を作出しており、内部には、縄文を充填して一部を磨消している。底部付近は、約半分が現存しているが、その欠損断面は、粘土の接合面からの剝離を予想させるもので、従来の円形の底部の形状とは、異なるもので、特殊な製作工程による痕跡と考えられる。あるいは、丸窓状の円孔などを持つ香炉形土器などの特異な形態の土器である事を予想させる。

2）貝　類

他の遺物と共に山林内の貝層部から出土した。

軟体動物

腹足綱

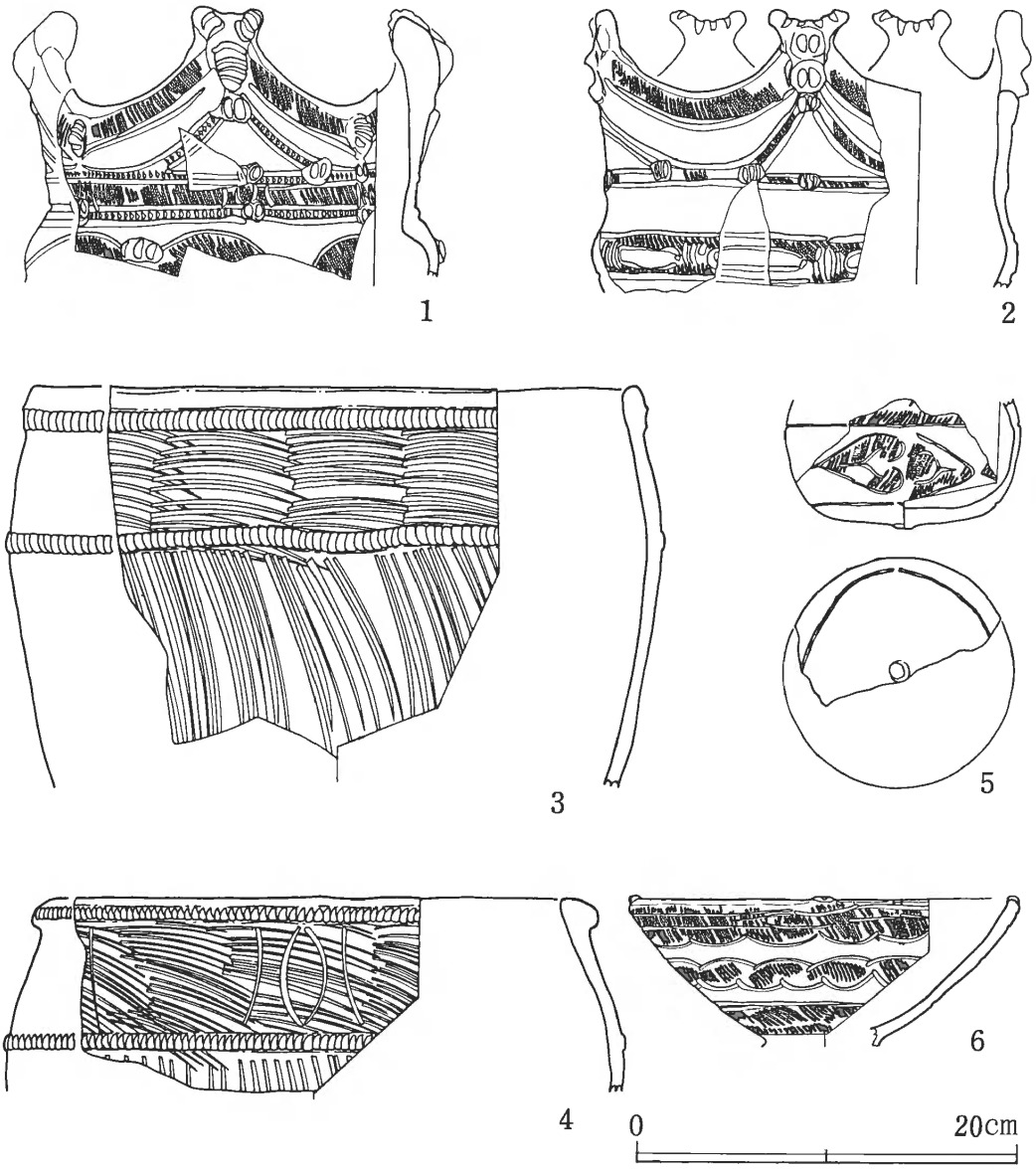
1	イボキサゴ	Vmbonium(Suchium)moniliferum
2.	ウミニナ	Batillaria multiformis
3.	アカニシ	Rapana thomasiana
4.	バイ	Babylonia japonica
5.	アラムシロガイ	Reticunassa festiva
6.	マイマイの一種	Euhadara qua-esita
7.	キセル貝の一種	Clausiliidae geu. et sp. indet

掘足綱

1.	ツノガイ	Antalis weinkauffi

斧足綱

1.	サルボウガイ	Scapharca subcrenata
2.	マガキ	Crassostrea gigas
3.	ヤマトシジミ	Corbicula japonica
4.	ハマグリ	Meretrix lusoria
5.	カガミガイ	Phacosowa japonicum
6.	オキシジミガイ	Cyclina sinenis
7.	アサリ	Tapes(Amygdala)philippinarum
8.	シオフキガイ	Mactra veneriformis
9.	ミルクイ	Tresus keenae
10.	オオノガイ	Mya(Arenomya)arenaria oouogai
11.	マテガイ	Solen strictus



第3図　殿台貝塚出土の土器実測図

以上の19種類が確認されたが、更に詳細な分析を行なえば、更に多くの貝類が検出されるものと思われる。貝相は、中・小型のハマグリ、オキアサリ、キサゴなどが主体となる様であった。ヤマトシジミの検出は、縄文時代後期から晩期初頭にかけて周辺の貝類の採捕地が、汽水域へと次第にその様相を変容しつつある過程を示しているのであろう。この地に、魚骨や獣骨が採集されたが未同定であり、その詳細は、後の機会に譲りたい。

Ⅳ まとめ

遺跡の概要と、遺物の説明を行なってきたが、ここでは、纏まって採集された晩期初頭の土器群のより具体的な観察を行ないまとめに変えたい。

先に行なった類別を以って説明すると、深鉢形土器第1類・同第2類と浅鉢型土器第1類・同第2類は、精製土器として捉えられよう。深鉢形土器第1類・同2類は、安行式土器群のセットの中で安定した位置を占めているものである。

第1類では、第4図1が、やや古式的様相を示すが、2・3は、形態や瘤状突起の状態などから、安行2式に比定される。第2類では、先の分類に際して2細分した様に、両者の間には、若干の差違が観察された。

復原実測図から両者を詳細に比較すれば、a型（第3図1）では、瘤状突起には、3～4本の太い沈線による横位の刻みが施されており、波頂下には、刻みを施した隆起帯による三角形の内帯文が表出されている。この文様帯下に接続して同じく刻みを持つ隆起帯で文様帯が区画されている。内部には、縄文が充塡されており、孤状文が施されている。この様に胴上部の文様帯は、以上の2つの文様帯から成っている。胴部文様帯は、現存部から推定すると、瘤状突起によって連結されるコンパス文から成る文様帯が想定できる。以下の文様帯は、埼玉県石神貝塚（註3）の資料などに観られる様に、底部付近に縄文帯を持つものが一般的な様である。

これに対してb型では、波頂部の突起は上下2単位の押圧へと変化し、又、各波頂間の口縁に付された突起は、省略されている。又先述した様に内帯文の表出は刻みを施した隆起帯から、隆起帯縄文へと変化している。内帯文下の文様帯は、無文帯として残存する。そして胴下部の文様帯は、a型のコンパス文から縦位の沈線を施した瘤状の突起によって連結される粋状文が成立している。以下は、加曽利南貝塚（註4）の資料の極く無文化する様である。

この様な諸点から両者を比較すると、明らかに、b型は、a型の文様帯・文様表出技法などの諸点が、簡略化・変容されたものという事が、理解できよう。

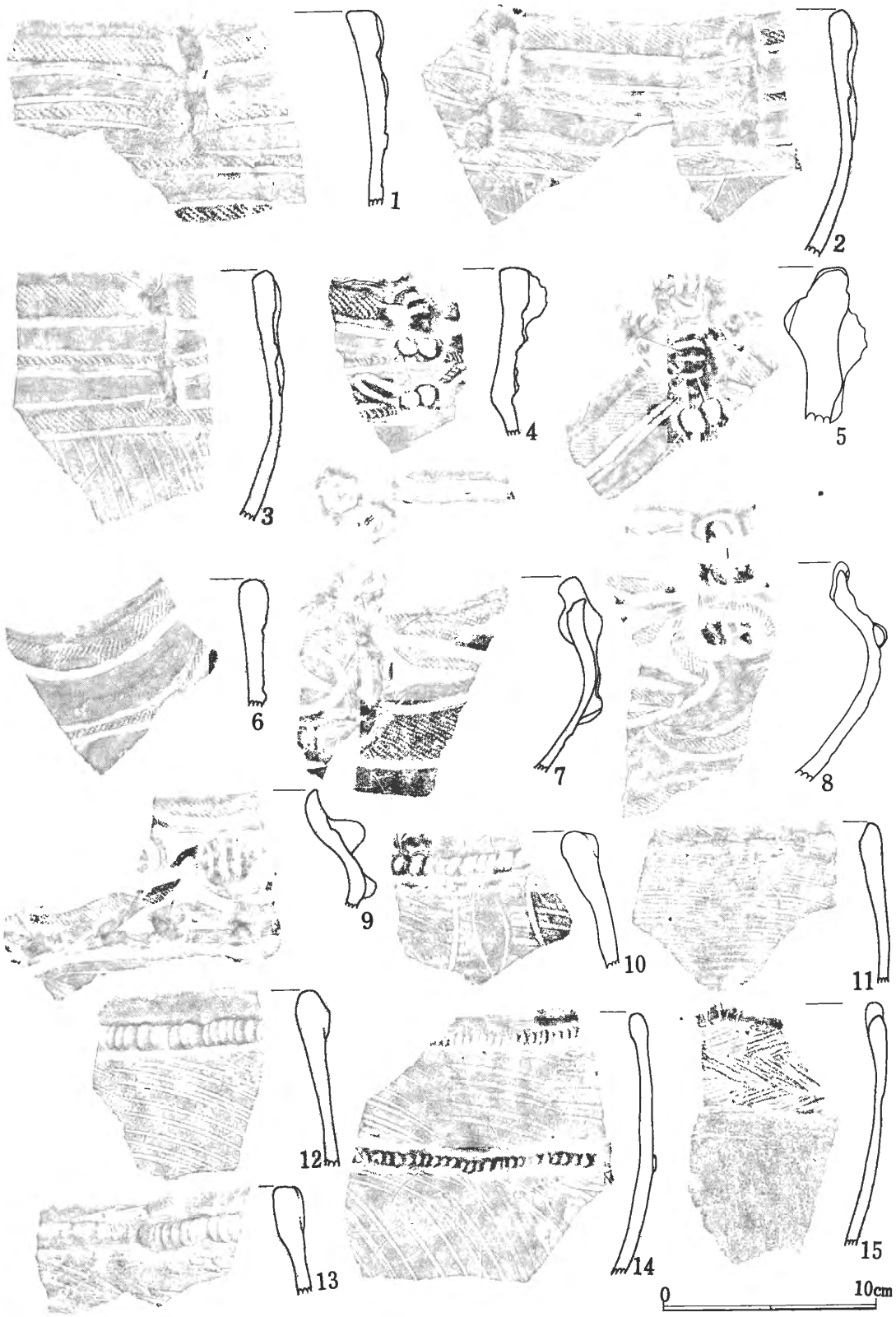
a型の土器については、その特徴から従来の安行2式として促える事が可能であろう。b型の土器については、a型との間に強い型式的連続性を有しながらも、その様相は、より後出的なものである。

加曽利南貝塚出土の晩期縄文式土器の説明（註5）にあたって鈴木公雄氏は、安行Ⅱ式土器をA型とB型の2種に分離して考え、それらは、同式の細かな時期差・地方差をも反映しているという考えを示し、安行Ⅱ式B型の組合せの中で、この様な波状口縁深鉢を促えようとしている。加えて同氏による関東地方に於ける晩期縄文式土器の一連の研究の中で、波状口縁の深鉢と文様帯の研究（註6）が行なわれており、その中では、文様要素とその配列の関係をDesign Systemという概念で促え、安行系波状口縁の深鉢に観られる波状単位数と文様要素の配列の規則性を指摘した。

それによれば、安行Ⅰ・Ⅱ式では、波状単位数は、4を基本としており、文様の配列は、波頂数の4又は、その倍数に等しいという規則性を指摘し、それが安行Ⅲa式に至り4～8へと変化し安行Ⅲb式に至り5に安定するという。そして安行Ⅱ式から同Ⅲa式に至る経過に生じる波状単位の変化は、亀ヶ岡式土器のDesign Systemの影響によるものとしている。後述の同氏の見解からすれば、殿台貝塚の深鉢形土器第2類b型は、安行Ⅲa式の範疇を以って促えられるべきであろう。

最近、茨城県広畑貝塚出土の晩期縄文式土器の分析を行なった金子裕之氏は、同論文（註7）の中で、山内清男氏、鈴木公雄氏、杉原荘介・戸沢充則両氏、早川智明氏らの過去における研究成果の再評価を行ない、それをふまえて、あらためて安行2式と同3a式の関係について層序関係、土器組成論を中心とした研究の展開を行なっている。

同氏の操作から、かつて山内清男氏によって設



第4図　殿台貝塚出土の土器拓影

定された安行3a式の再検討が加えられ、山内氏によって抽出された形態以外に数種の形態の補完によって安行3a式の内容を明確にしたものと言える。

同論文の分析に於いては、本貝塚の先の資料は、安行3a式として分類されるものであろう。しかし、同様の波状口縁の深鉢に於いて従来の安行3a式のメルクマールとされた三叉文を施しているものも存在し、又その中でも、広畑貝塚Bトレンチ出土資料中に観られる様に（註８）三角形の内帯文内に向い合う三叉文が、描かれる場合や、又同じく広畑貝塚Bトレンチ出土資料（註９）や近隣の法堂遺跡出土資料（註10）など、内帯文直下の文様帯に三叉文が描かれる場合など、同一形態の土器に於いても若干の差が認められる様である。

浅鉢形土器は、３点のみであるが、先の第２類ｂ型と共伴しており同一段階の組成に含まれるものであろう。特徴的な文様は、太い沈線の三叉文であり、これらは、日本先史土器図譜（註11）の茨城県福田貝塚出土の安行3a式土器の標式資料に近似するものである。この様な胴部の張る浅鉢は、安行3a式に至り、にわかに増加する傾向にあり(註12）晩期初頭の特徴的な器種の１つと考えられる。

他に三叉文を施すものに異形の土器があるが、同一層よりの出土から同時期のものと考えられる。

粗製土器では、深鉢形土器第３類が主体となっている。連続指頭圧痕による紐線文は、安行式土器群の地域性として指摘された奥東京湾周辺部に分布する粗製土器と対照的な様相を示しており、従来の通説を裏付ける状況を示していると言える。（註13）

以上、殿台貝塚より採集された土器について述べてきた。個々の土器の説明に際して記述した様に、本地域に於ける安行２式から同3a式に至るまでの経過を良く示している好資料であると言える。特に貝層上に堆積する包含層から良好な資料が得られ、また削平部分の観察では、貝層部から安行２式が採集されており、周辺地域には数少ない後期末葉から晩期初頭にかけての良好な資料を埋蔵している遺跡と考えられる。

遺物の記述にあたっては、資料の採集状況やその量的な制限から、充分な検討を行なう行が出来なかったが、本地域には数少ない良好な資料である為、敢えて詳細な記述を試みた次第である。筆者の未熟さも加わり、とりとめのない文になってしまったが、今回の資料の紹介を通じて殿台貝塚の重要性が、認識されれば幸いである。

最後になってしまったが、普段より諸々の御指導を頂いている加曽利貝塚博物館の庄司克氏や資料の紹介の機会を与えて頂いた千葉市教育委員会の後藤和民氏に感謝の意を記して結語にかえたい。

（明治大学　学生）

〔脚　註〕

註１　千葉市史編纂委員会「千葉市史第１巻・原始・古代・中世編」昭和49年

註２　　同　「千葉市史史料編１」昭和51年

註３　小田静夫・金子裕之・金子浩昌「埼玉県石神貝塚の調査」『埼玉考古』13・14号　昭和50年、第26図８の資料による。

註４　杉原荘介他「加曽利南貝塚」中央公論美術出版昭和51年、第43図１の資料による。

註５　註４に同じ。又、同氏は、安行式の説明の中で、その細別に、ローマ数字を用いて記している為、本稿に於いてもその参考部分は、それに従った。

註６　Suzuki Kimio「Designsystem in Later-jomon Pottery」『人類学雑誌』78巻１号昭和44年

註７　金子裕之「茨城県広畑貝塚出土の後、晩期縄文式土器」『考古学雑誌65巻１号』昭和54年

註８　註７、第19図11

註９　註７、第19図12・13

註10　戸沢充則、半田純子「茨城県法堂遺跡の調査・製塩址をもつ縄文時代晩期の遺跡」『駿台史学』18号　昭和41年

註11　山内清男「日本先史土器図譜」先史考古学会、昭和42年

註12　註７に同じ。金子氏の広畑貝塚Ａ・Ｂ両トレンチ出土の安行式の組成率では、安行3a式になると浅鉢の出現率が安行２式のそれの２倍近くに増加すると言う。

註13　金子裕之「安行系紐線文土器における二者」『信濃』27巻７号昭和46年